



熊本県立大学

中村洸介 多賀有紀



震災ボランティア

1.一時避難場所運営 ～トイレ対策委員会～

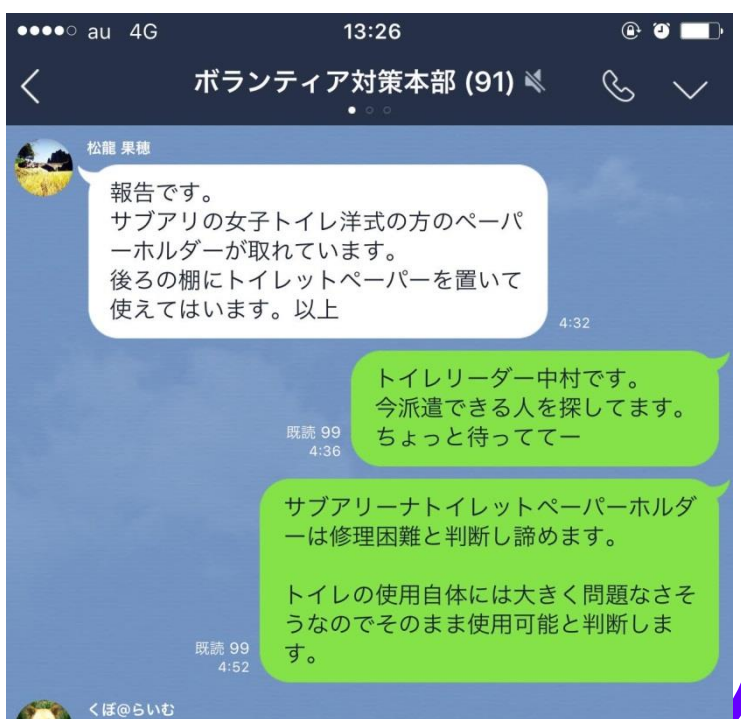


本震後、流れなくなったトイレの対応やトイレへの誘導を行うための組織「トイレ対策委員会」を結成。プールの水を運んだり、簡易トイレの設置をするなどのボランティアを行いました。水が流れるようになってからは大学内のトイレを清潔に保つため定期的に清掃活動を行っていました。



2.大学生だからこそできた！？ ～LINEでのスピーディな連携～

熊本県立大学の避難所運営はほとんど学生主体で行われていたというのが大きな特徴だと言われています。その中で注目されたのが「LINE」を有効活用していたことでした。LINEによるスピーディな情報共有や指示伝達により多くの問題を迅速に解決することができました。



3.今後の課題と計画

震災時のボランティアというのはあくまで緊急時のボランティアです。本当に大事なのは緊急時でもなんでもない平常時のボランティアであり、自発的にボランティアに参加していく心を育てていくことが大事になって来るのではないかと思います。そのために、現在熊本県立大学ではボランティアセンターを仮運用中です。

行動記録



オーラル・ヒストリー

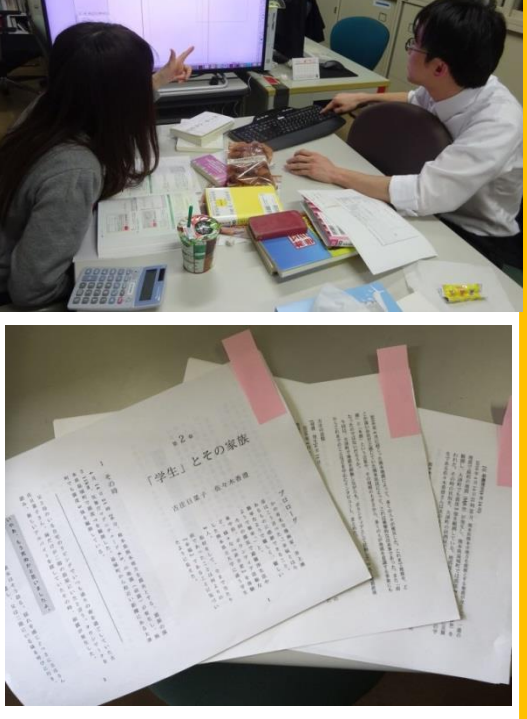
1.震災の記憶を記録する！ 大津町を対象としたオーラルヒストリー

『震災による困難や試練、挫折に直面しながらそれを乗り越えようとしている人たちの言葉を後世のために記録する』というテーマのもと大津町に住む様々な方への取材を行い、その人たちが震災期間中にどのような想いで、どのような活動を行ったのかを記録し大津町の広報誌である『広報おおづ』の12月号に特集という形で6ページ掲載。



2.書籍化活動『復興へと向かう一歩 ～大津町22名の取材記録～』

今回は大津町で様々な方に取材を行い、取材で得た口述記録を基に300ページの本を作成する予定である。第1部では「記憶を記録する」とし人々の行動・持ち場・心境という3つの視点で熊本地震を記し、第2部では「それぞれの記憶」ということで年齢も立場も異なる方々の取材記録から震災時の苦悩や奮闘の様子を記す。



インタビュー対象者

学生(2名)	企業関係者(3名)
大津町役場職員(14名)	
民生委員(3名)	町議会議員(1名)
消防団(1名)	地域おこし協力隊(1名)
区長(1名)	
年齢も立場も異なる全26名	

質問事項

- ・震災後1カ月の動き
- ・一区切りついた時期
- ・震災前と現在で考え方の変化
- ・震災前と現在で行動の変化
- ・これから望むこと

今後の活動計画

2月末に書籍完成予定！